

国東半島の

お産小屋と姥捨山と

入江 英 親

東京からの旅行団を案内して、二泊三日の予定で県内の史跡巡りをした時のことである。銅板法華経と太郎天像で知られた、豊後高田市大字加礼川の屋山の長安寺にお詣りして、部落のお産小屋を見学した。昔は石と赤土とで四方の壁を積み重ねた、ネリベイの家であったが、現在は普通の家に建てかえられ、半分は精米所に使用されるようになっていた。この部落を横ぎる不浄道を境にして、上に四軒、下に二軒の人家がある。お産小屋は上の四軒の人々が、現在もお使用している。たまたまお産が二人重なるような時には、一人は不浄道より下の家を借りていたとのことである。

妊婦は三十三日間お産小屋にたてこもり、この間の食事は

家族が自宅から運んでいた。時によってはお産後十日か十五日頃から、自炊する者もあった。この時はシオカワに出ると称して、三十三日目にお産小屋から引きあげる時のように、赤子をつれて向う谷（多田茂利氏裏の下）に行き、持参した塩で洗い清めた。こうして始めて、カマドの前に行くことが許されたのである。お産をした家と他の家では、三十三日間はお互にお茶も食事も出さぬことになっている。要するに火を別にする意味からである。

長安寺を後に宿舎に向うバスの中では、お産小屋の話して持ちきりであった。都会の人には余程珍しかったと思われる。この地方では黒不浄（死の穢）、赤不浄（月のものの穢）に対し、白不浄と称してお産を穢れと考える思想が受け継がれ、出産は家を出てお産小屋で行っているのである。ご婦人のたれかがこう発言した。「お産を不浄と考えるのは、もっての外である。男女不平等も甚しい。これは全く男尊女卑の思想に起因するものである。男性も女から生れたのではないですか」と。女性の拍手が笑い声と共にまき起った。これに対して同く女性の中から反論が出た。茅ヶ崎市の細野加代子氏であった。「それは違います。女卑ではなく、女性を護ろうと

する、国東男のやさしい思いやりの人柄が、いつの間にか生み出していた。温い慣習ではないでしょうか。関東地方では産後二十一日間休むのが最高で、昔はお産がすめばその日から、働かねばならぬ婦人さえ多かったと聞いています。現在は労働基準法で、お務めしている人については、産前産後の休暇が定められているが、国東地方では古い昔から、白不浄と言う名称のもとに、三十日間も休ませてもらっていたのです。何と有難いことではないでしょうか。今日までお会いした何人かの国東の方々のお人柄とも思い合せて、私はそう思うのです。」と。このお説には、男性は勿論のこと、男尊女卑説に拍手していた女性の皆さんも加わった、大拍手となった。

細野氏のお説に、ほのほのとした温かさを感じた私は、国東半島の中の姥捨山について、お話しすることにした。場所は奇岩秀峰に富んだ景勝地、国立公園内の一部、西国東郡香々地町の夷谷、六所神社境内の丘上である。社前には足利尊氏の植えたと伝えられている老大木六本杉があったが、今は伐さいされて二、三本を残すのみとなっている。本殿の向って右側には、岩窟を利用した社殿やお堂がいく棟かあるが、そ

の右端には、腐朽してほとんど柱ばかりになった薬師堂が岩窟の中にある。堂前は狭い平地。ここが姥捨ての場所だったと伝えられている。捨てられた老人のか細い読経の声と鈴の音が、昼夜をわかつたここから聞えてきたと言う。薬師堂の横の岩壁には、光背形に彫りくぼめて、その中に合掌した比丘形の坐像一軀が、厚肉彫りされている。岩壁の都合で南東向きになっているが、薬師の浄土東方に向かって合掌させたものと思われる。

国東半島の天台宗寺院には、ほとんど六所権現が祀られている。この六所神社も、近くの靈仙寺との関係があったものかと思われる。靈仙寺は六郷山末山十カ寺の一つ、夷山靈仙寺である。靈仙寺と六所神社との中間にはさまれた実相院は靈仙寺十二房の一つともあり、また他の記録には根本院（靈仙寺のこと）とあり、本堂がここで実相院は講堂にあったともある。それは鬼も角として、この六所神社の神山が、ある年齢に達した老人を子供が捨てて姥捨山だとは、どうしても理解できないことである。この神山はどんな老人でも自由に行動の出来るような、危険の全くない安全な場所である。とすれば、姥捨山とは、深沢七郎氏の作品「檜山節歌」がもた

らすような、あんな残酷なイメージのものとは全く異っているのではあるまいか。何年前かの敬老の日のテレビ放送に、統計による老人の半数以上は、安楽死を希望している旨が発表されていた。平安貴族はその死に当って、阿弥陀のみ手からのばす救いのひもにすがって、極楽往生を願ったと言う。

六所神社内の姥捨ても、平安貴族と同じ願いの老人の集いの場ではあるまいか。孤独な、やもめ暮らしの老人の、慰安所の性格を有した場所とは考えられないだろうか。かつて私は別府市の後藤武夫氏から、別府市効外にも姥捨山のあるという話を聞き、現地に案内してもらったことがある。それは現在の別府市北中町で、松川増夫氏の所有地内で、ここには二基の姥捨塚が存していた由である。今は破壊されて、塚の上に立てられていたと言う自然石二本が祭られているのみであった。鶴見七湯の中の一つの谷湯がここである。名大庄屋の直江雄八郎が、姥捨ての隠れみもの下に、当時しいたげられていた庶民の老人たちへの慰安のために、せめて自由に温泉にでもはいり、楽んでもらおうとした温い思いやりの場所がこの谷湯であったと言う。

お産小屋と言ひ、姥捨山と言ひ、それは婦人を護り、老人

に心の安らぎを与えようとする善意に生れたものである。その根底に通ずるものは、国東の人々が抱いている温い思いやりの心である。なお国東半島には、前述したような浄土思想にもとづく信仰が、明治初年まで見られていたと言う。このことは、国東半島の人々の心の中に、生きつづけて来ている信仰心が、いかに強いものであるかを、ひしひしと知らされる次第である。

・杵築市南台

中津市角木町の古文書について

中野政喜

当町内は秋の祭り行事が終ると、次の座前に引継がれる当宮というものがある。この当宮の中には

- (1) 座前記録帳（享保二年起稿、明治四年までの記録）
- (2) 豊日別神社書上帳（闍無浜竜王社宮司重松義隆が、明治四年十月中津県庁に提出した写しである）

(3) 大神龍豊日別宮縁起（箱に文政十一年六月、蓋には永